平成７年10月24日第３種郵便物認可　２０１１年１０月10日発行（毎月１回10日発行）・通巻２５７号

[月刊]
En-ichi 圓一
2011
10
no.257

魂の教育を実践する

インタビュー
大切なのは「良き人生観」持たせること

植草学園大学教授 野口芳宏

日本の家庭を守る教育情報誌

En-ichi 10 October 2011 No.257

Contents

今月の焦点

教師になりたての頃、校長から「教育で一番大事なものは何か」と問われたことがありました。…校長はこう話してくれました。「教育というのは、子供に良き人生観を作ること。これに尽きる」—。

教育で最も大切なのは「良き人生観」持たせること　野口芳宏…5

カンボジアでは…（精神疾患や障害を持って）地域の中で生活している人たちは…表情も良く、生き生きと暮らしています。…彼らは地域の中で受け入れられ、家族と一緒に生活をしているからです。

カンボジアで気づいた家族と地域、仏教の力　塚越克也…11

家庭の最も基本的な要素の一つは、子供を生み育てる機能です。…子供は社会が育てるという子ども手当の理念は、結果として家庭の基本的な機能を弱体化し、分解しようとしています。

家庭の価値を守るために今何をすべきか　菅野英機…14

男性の家庭参加、また結婚前の心身共の準備、そして結婚後にいかに家庭を守っていくかを学ぶのが「結婚教育」の主眼になる。…米国ではこの動きが社会運動までつながっている。

米国で広がる「結婚教育」運動と「人格教育」…19

3 巻頭言
大震災経て、スピリチュアルな教育へ　前国士舘大学教授・学術博士(Ph.D) 岩間 浩

4 教育再生への課題と展望
利他の生き方が自分を幸せにする
教育で大切なのは「良き人生観」持たせること　植草学園大学教授 野口芳宏

10 家庭学
カンボジアで気づいた家族と地域、仏教の力　臨床心理士 塚越克也

12 情報ファイル
大卒者の16%が進路定まらず
コミュニティサイトの犯罪被害、初の減少

14 家庭学
家庭の価値を守るために今何をすべきか　日本民俗経済学会理事長 菅野英機

16 子育ては絵本で大丈夫
「まちのねずみといなかのねずみ」　劇団天童／天童芸術学校代表 浜島代志子

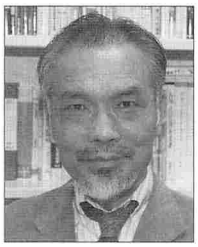
18 ワールドアフェアーズ
米国で広がる「結婚教育」運動と「人格教育」

20 発言
小説『二十五時』が意味するもの—東洋精神への待望　哲学者 河端春雄

22 Book Review

24 歴史と伝統の探訪
平泉、「浄土」を表す世界遺産／岩手

巻頭言



前国士舘大学教授
学術博士（Ph.D）
岩間 浩

大震災経て、スピリチュアルな教育へ

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災は、史上最大規模の巨大地震と、巨大津波の殺到による死者・行方不明者二万百四十名以上（九月現在）、さらに、一九八六年のウクライナ・チェルノブイリ原子炉のメルトダウンに匹敵する原子炉史上最大級の事故により、三重苦の大災害となった。電気・電話・ガス・道路などインフラストラクチャーの崩壊はもとより、経済・産業・政治・情報・文化の混乱と停滞のみならず、一家離散、失職、コミュニティの破壊、トラウマの発生、情報の混乱、海外の過剰反応など人心動揺が広がった。まさしくこれは、自然・物理的かつ文化的破局（カタストロフィー）現象である。

通常カタストロフィーの後には一時期を画するかのような大変容が生じる。今回も、悲惨な状況が広がる一方で、節約・節電・省エネの徹底、経済性より安全性の重視、家族やコミュニティの絆の重視など、生活上、社会上の価値転換が一挙に進行している。その意味で、ピンチはチャンス、破局は反面に建設的な面を有しているととらえうるのではないか。

ヒンドゥー教神話・三大主神のひとつシヴァ神は、恐ろしい破壊神として畏怖されてきたが、一面においては、恩恵を授け、破壊した世界を再建する創造神でもある。これは破壊と創造とがセットになっている自然界の本質を示しているのではなかろうか。

大震災以後、結婚するカップルが増えたという。大災害でなによりも励ましとなったのは、残った者同士が助け合い、分かち合う精神と行為、すなわち心の絆であったことが、人々に認識されたからにちがいない。被災者が自宅に戻った時、真っ先に捜したのが位牌であり、アルバムであった。これらは経済的価値観からすればとるに足りないものであろうが、先祖との絆、家族の絆という目には見えない価値が何よりも大切なものと自覚されるからである。

また、大震災後に、ボランティア活動が活性化した。かつて坂本九が歌った「上を向いて歩こう」が盛んに歌われ、やなせたかしの貧しい家の子どもに自分を食として差し出す「アンパンマン」の漫画が被災者の子ども達をはげましているという。被災地で行った「祭り」が地域の絆を取り戻し、人々の生きるはげみになっている。こうして、スピリチュアルな価値が震災と共に人々の心の中に蘇ったのである。

これまで教育界で心の教育の重要性について何度も強調されてきたが、あまり効果がなかった。しかし、この大震災で心の絆がいかに大切であるかが改めて認識されている。今こそ、道徳教育の時間だけではなく、すべての教科、すべての学校活動において、心の絆を中核とする総合的学習システムを作ることが、大災害の教訓を生かし、社会を再生させる方途である。未来の健全な社会の構築のために、心の絆を育てるスピリチュアルな教育方針を確立したいものである。それが、カタストロフィーを創造的に超える道なのではないか。

利他の生き方が自分を幸せにする

教育で最も大切なのは「良き人生観」持たせること

教育で最も大切なのは「良き人生観」を持たせること。そして良き人生観は「利他に生きる」ことにつながる。

行動は人生観が決める

私たちは人間です。言うまでもなく人間も「動物」です。

動物が動くことを「行動」と言います。行動には必ず「判断」があります。判断に基づいて行動するのが、人間の特性です。例えば、このことを学びたいから何があっても会合に参加するという人もいるし、今日は暑いから止めようという人もいます。行動は判断によって選択されるわけです。

ですから、判断が健全であれば、行動もおおむね健全ということになります。判断が歪んでいると、行動も歪んでしまいます。

では、判断は何に基づいて行われるでしょうか。それはその人の「価値観」に基づきます。「人生をより良く生きよう」という価値観を持っている人は、判断の傾向も積極的になってきますし、「まあ無難に過ごせればいい」という価値観の持ち主は、常にそういう判断に傾いていくことになります。

価値観はさらに「人生観」に左右されます。人生観は、求める心があれば、どこからでも学ぶことができますが、「素直さ」が大事ではないかと私は思います。素直な気持ちを持っているというのは、コップが上向きになって水が入るよう

野口芳宏
のぐち・よしひろ
植草学園大学教授

1936年千葉県生まれ。千葉大学教育学部卒。小学校教諭、教頭、校長、北海道教育大学教授、麗澤大学講師などを歴任。全国の教師、父母を対象に講演や模擬授業を行っている。千葉県教育委員、授業道場野口塾主宰、日本教育技術学会名誉会長、日本言語技術教育学会副会長。専門は国語教育、家庭教育、道徳教育。著書に『小学生までに身につける子どもの作法』『子どもは授業で鍛える』『音読・道徳教科書 日本の美しい言葉と作法』『野口芳宏著作集「鍛える国語教室」』(全23巻)、『利他の教育哲学』他多数。

なものです。心のコップが上向きになっている子供は、家庭からも社会からも学校からも多くのことを学び、心のコップに注いで豊かになります。しかしコップを伏せていると、どんなに価値のあることでも、こぼれてしまって中に入らないわけです。「心のコップは上向きに」と、子供たちに語りかけると分かりやすいですね。

教育で最も大切なのは子供に「良き人生観」を持たせること

私は教師になりたての頃、校長から「教育で一番大事なものは何か。言ってみなさい」と問われたことがありました。私が答えられずにいると、校長はこう話してくれました。

「教育というのは、子供に良き人生観を作ること。これに尽きる」―。良き人生観を持たせれば、良い価値観を持つ。良い価値観に基づいて判断をし、行動を選択するようになれば、間違いのない人生の道を歩める。教育で最も大切なのは「良き人生観を持たせる」ことなのだ、と。

様々な人に支えられた自分

では、「良き人生観」とは一体どのようなものでしょうか。

私は後期高齢者の年齢になって、改めて思うことがあります。それは日常生活を送る上で、自分の力のみで暮らしているということはほとんどないということです。

先日、長崎で小学生に道徳の授業をしてきました。私は最初に子供たちに聞きました。「みんな生きているよね。どうして生きていられるのかな?」と。すると子供たちは「命があるからですよ」と答えてくれます。「そうだね。ところで、あなた方の命は誰のものかな?」と聞くと、皆、「自分のものだ」と答えます。しかし「そう。自分で創ったのかい?」と聞くと、子供たちは答えられなくなります。自分で創ったわけではないからです。

「ではどうして命を授かったのかな? それはお父さん、お母さんがいるからだよ」と。「では、どうして毎日、生きていられるのかな?」「ご飯を食べているから」「何を食べた?」「パン」「そのパンは自分で作ったの? 寝る時の布団は自分で作ったの? お米は自分で作ったの?」―違いますね。

このように、私たちは様々なものに支えられて命を全うしているのです。その上で「いったい君たちの命は誰のものだろうね?」と改めて聞くと、子供たちにはまだ

改めて考えてみると、私たちは「生かされている」ことに思い至る

「生かされている自分」であることに気づくと人生観がちがってくる

答えられません。けれども、少なくとも自分だけのものではない、様々な人、様々なものに支えられて自分の命があるのだ、ということに気づきます。

「自分で生きているのだ」というのは浅薄な考えで、改めて考えてみると、私たちは本当に「生かされている」のだということに思い至ります。

遺伝子工学の世界的権威である村上和雄先生（筑波大学名誉教授）は、遺伝子の並び方を見ると神の業としか思えないという意味のことを語られています。何か分からないけれども、偉大なものが我々を大きな力で包んでいるのだ、と言われます。

自分が作った、あるいは自分だけの力で作り出したというものは、まずないでしょう。私が話しているこの言葉も、書く文字も、私が作ったわけではありません。そう考えると、自分の力で生きているとか、自分の考えで作ったと言えるものは、一つもない。まさに私たちは生かされているのです。そういうことに気づかせると、人生観が違ってくるのです。「おれが、おれが」という考え方では、人生観は歪んできます。

目に見える「小恩」見えない「大恩」

「生かされている」という考え方を、日本では「恩」と言います。「恩」という字は「心に因る」と書きます。この恩を知るかどうか、恩を深く認識するかどうかによって、人生観は変わってきます。

恩には、小恩と大恩があります。小恩は目に見える恩です。例えば、冷たい水を持ってきてもらった、あるいは座りたいと思った時に席を勧められた。そういう時にはみんなお礼を言います。これが目に見える小恩です。

これに対して、大恩は目に見えない世界なのです。例えば、日本人として生を受けたことの有難さといっても、なかなか自然には感じられません。教えてもらわないと分からないことです。空気があることの有難さと言っても、当たり前じゃないかということになります。

朝が来て、昼が来て、夜が来る。この規則正しい循環の有難さ。明るい光も有難いし、真っ暗な闇も心の安らぎには欠くことができない。このように私たちは、小恩、大恩の中で生かされている。こうい

小恩・大恩の有難さに気づくと人生観が変わる

うことに気がつくと、人生に対する考え方が変わってきます。

謝恩の言葉で人生が豊かに

恩を忘れることを「忘恩」と言います。そのような人を「忘恩の徒」と言います。今、私たちはあまりにも日々が満たされていて、これらの有難さをついつい忘れがちです。忘恩の徒は最低の人間です。このような人間には恩の有難さを一生懸命教えなくてはならない。特に教育者はそう努めるべきです。

次に、「ああ、私たちは生かされているのだ」と、恩を知ることを「知恩」と言います。

そして、恩を深く知れば、そこに感じるところがあります。これを「感恩」と言います。知るということは頭で知ること。感じるというのは心で感じることです。その有難さがしみじみと分かる。親の有難さ、母親の慈愛、父親の厳しい愛。それらを感じることが感恩です。

深く感じれば、「このままではいけない」と思う。これが「謝恩」です。今も謝恩会という言葉が残っていますが、恩に感謝をするということです。どれほど先生にお世話になって卒業にこぎつけたか分からない。このような恩の有難さを教師は教えるべきです。

私は今、大学で教えていますが、成績を付ける課題の一つとして、正式な礼状を書かせることにしています。「野口先生に授業を半年間教えてもらって、有難かったことへの正式な礼状を書く」という課題です。「拝啓」という時候の挨拶から、「お変わりなくお過ごしでいらっしゃいますか」という言葉まで教えました。改めてペンを持って、相手の顔を思い浮かべながら、有難いと思ったことを思い出しながら具体的に書くのです。社会人になったら、正式な礼状が書けなければ一人前とは言えません。

中には、ごく簡単に書いてくる学生もいます。そこで私は「量よりも質という言葉があるが、それは間違いだ。量は質の一つなんだ。詳しく丁寧に書けるということは、質そのものなんだ」と教えます。そうすると、長く具体的に書いてきます。

こうして、謝恩の言葉を教えることによって、彼らの人生もまた豊かになるはずです。

人生はすべからく報恩であるべき

そして、恩に深く感謝するようになれば、それに報いようとします。それが「報恩」です。報恩の人生です。人生はすべからく報恩であるべきです。こういうことに気づかせると、世界の見え方がまた違ってきます。

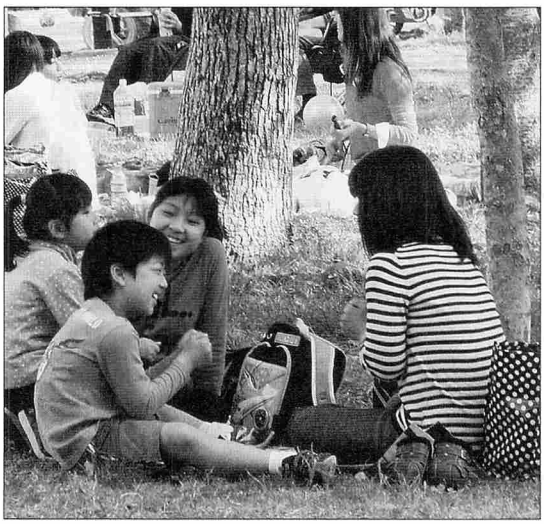
私の生き方の一つに「頼まれたら断らない」という信条があります。もちろん同じ時間に講演を頼まれたら断らざるを得ませんから、正確には「努めて断らない」ということになります。

考えてみると、「頼まれる」ということは非常に有難いことです。一億人以上いる日本人の中で私一人

報恩の人生に気づかせると世界の見え方が違ってくる

が頼まれるのですから、これほど光栄なことはありません。「私でよかったら、喜んでお引き受けしましょう」と言えば、相手も喜んでくれます。これも、小さな報恩の一つです。

今朝も、ある出版社から原稿依頼の電話をいただきました。教員向けに立派な雑誌を作っていたのですが、売れなくなってしまい、廃刊になるそうです。ついては最終号に原稿を書いて欲しいということでしたので、私は有難く書かせていただきますと返事をしました。



「大事にされている」という実感があれば幸せ

幸福の一つの正体は「大事にされること」

頼まれたら断らないということの基本の原理は、「他に利する」ということです。この反対は「己に利する」、つまり「利己」ということです。常識的に考えれば、利己的な人のほうが幸せになるはずです。己に都合のいいように人生を設計するのですから、そのほうが幸せになるはずなのです。他人本位に生きるということは、自分の幸せを築く上で必ずしも都合はよくないはずです。

ところが、実際はそうではありませんね。利己的な人の末路には、二つの特色があります。一つは、他人から助けてもらえなくなります。助けてもらう必要がないからです。己を利していますから。そして、二つめには、人との関係が希薄です。自分のことだけを考えていますから、やがて孤立します。

人間という言葉は「人の間」と書きます。人間は人と人の間で初めて幸せになれるわけですね。人の字も「支え合っているという意味」と解釈する説もあります。支え合うのが人である。間で生きているのが人である。利己的に生きている人は、最後は孤立無援になるというわけです。

それでは、幸福というのは一体何なのでしょうか。皆、例外なく幸福になりたいと思っています。私は幸福の正体は「大事にされること」ではないかと思っています。仮に私が病気で倒れたとしても、家族が「大丈夫？」と言ってくれて家族から大事にされていれば幸せです。事故にあったり何かひどい目にあっても、大事にされているという実感があれば幸せです。地位でも名誉でも健康でもお金でもない。温かい心に包まれて人生を過ごすことができれば、これほど

人のことをいつも大事に考える人は、誰からも大事にされる

幸せなことはない。「大事にされる」ということが、幸福の一つの正体ではないかと、私は最近考えています。

他に利するような生き方。人のことをいつも大事に考えるような生き方をしている人は、必ず誰からも大事にされて、良い人生を過ごします。逆に、立派な家に住んでいても、温かい人の心に包まれない、大事にされない、不安の中に生きているという人もいます。

「毎日が感謝で一杯」

「足るを知れば不足なし」という言葉があります。実にうまい言葉です。「足る」を忘れるから「不足」を感じるのです。不足を感じれば「不平」が生まれる。「不満」が生まれる。不平と不満の中で人生を送るとすれば、何と哀しいことでしょうか。不平不満を持っている人は、それが満たされると、すぐに次の不平不満を探します。ある程度のところで満足し、「これで十分過ぎる」と満足、感謝する。そういうところに幸せが生まれてくるのです。

私はサインを求められると、必ず「感謝」と書くことにしています。ただ「感謝」と書くだけでは面白くないので、草書体ではどう書くのかを本で調べました。しかし、草書体で書くと、なかなか読めません。そこで「これは感謝と読むんだよ。私のキーワードなんだ。毎日が感謝一杯だよ」と言うのです。

自分にとって得なことよりも、他の人にとって得になることをして生きるほうが、結果的に自分を幸せにする。幸せな人生を送ることができる。これが、私がこの年齢になって行き着いた一つの人生観です。E

日本人は偉大だ

いちばん心に響く！ 世界に誇る20人の生き方

杉原千畝　朝河貫一　織田楢次
望月カズ　野口英世　今西錦司
新渡戸稲造　鈴木大拙　新島　襄
西岡京治　ラグーザ玉　ほか

学校でもちゃんと教えてほしい！日本の心

増子岳寿 著　四六判／246頁　1680円

誇りと自信が湧いてくる！

ご注文は書店へ、お急ぎの方は下記へ

コスモトゥーワン
tel.03-3988-3911 fax.03-3988-7062
http://www.cos21.com
〒171-0021 豊島区西池袋2-39-6-8F

カンボジアで気づいた家族と地域、仏教の力

カンボジアでは、精神疾患や障害を持つ子ども達が、家族や地域社会に受け入れられ、生き生きと暮らしている。日本でも豊かな家族関係や地域社会を取り戻していかなくてはならない。

カンボジアでのNGO活動

私は、臨床心理士として、これまでに教育関係や福祉関係でのカウンセリングをたくさん行ってきましたが、その一方で海外でのNGO活動も続けてきています。中でも韓国とカンボジアでの活動は、今年で十年になります。海外での活動は、私自身の臨床観にも大きな影響を与えて、私自身を成長させてくれています。

カンボジアでは、精神疾患や障害をもつ人たちの支援を行っています。最近は首都のプノンペンにある障害児の入所施設を定期的に訪問して、その施設のスタッフや近隣のNGO関係者を対象として、動作法というCBR(Community Based Rehabilitation)の技法の講習会を行っています。その中の何人かは日本にも招聘してトレーニングを受けさせ、学会認定の有資格者も数人出てきています。

ところで、カンボジアという国にどのようなイメージをもたれるでしょうか? アンコールワット、貧しい国、悲惨な過去を持つ国、地雷などが、多くの人たちのイメージでしょう。確かにカンボジアは貧しい国であり、特に地方に行くと、教育も医療などの制度も整っていませんし、電気や水道などの最低限のインフラさえもない地域もたくさんあります。

では、そこで暮らしている人たちは、日本人よりも不幸で辛い生活を送っているのでしょうか? 必ずしもそうではありません。むしろ日本人よりも、もっと生き生きと幸せそうに暮らしている人がたくさんいます。例えば、カンボジアでは学校に行っていない小・中学生はたくさんいますが、引きこもりの子どもはいません。不登校が多いのは、心の問題ではなく教育制度が整っていないからです。学校に行かなくても、皆水くみや家事などを手伝っていますし、近所の子ども達と楽しそうに遊んでいます。そもそも、引きこもるための前提となるスペースがありません。カンボジアでは大家族で住んでいることが多く、ほとんどの家の間取りは、一間のみか、仕切りがあってもドアがありませんから、引きこもれる部屋がないのです。

生き生きとした障害児

また、障害を持つ子ども達も、地域で一緒に暮らしています。カン

塚越克也
つかこし・かつや
臨床心理士
1963年生まれ。九州大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程。九州女子短期大学と駒沢女子大学の教員を経て、現在は株式会社オルタナティブ教育研究所代表取締役。心理マネジメントコンサルタントとして、学校や企業での研修やカウンセリングをおこなっている。また、公立学校でのスクールカウンセラー歴は15年で、現在も本業の傍ら、東京都スクールカウンセラーとして都内の中学校に勤務。

ボジアには知的障害という概念がありません。なぜならば、地域の中に字が読めなかったり、数をきちんと数えられなかったりする人はたくさんいるからです。

精神障害者の人も同じように、地域で一緒に暮らしています。カンボジアには、入院施設のある精神科は、首都のプノンペンにしかありません。それ以外のほとんどの地域では、入院施設はおろか、精神科医もいません。カンボジアでは、統合失調症などの精神疾患の場合、まず伝統治療師のところに行き、祈祷をしてもらい薬草が処方されます。それでも症状が治まらずに暴れている場合は、木に縛られたりすることもありますが、暴力などがない場合には、家族と一緒に、炊事、水くみ、掃除、店番などをしながら、地域の中で暮らしています。

そうした、地域の中で生活している人たちは、日本の精神疾患や障害をもつ人たちより、表情も良く、生き生きと暮らしています。何故でしょうか？　彼らは地域の中で受け入れられ、家族と一緒に生活をしているからです。そして、特別視されたり、邪魔者扱いされたりすることもないからです。日本では、精神疾患や障害をもっていると、教育の場が違いますし（特別支援学級や特別支援学校など）、福祉サービスの対象者として、社会の中でも他の人と同じように扱われなくなります。また、家族や社会が受け入れられなくなると、施設や病院に入院させられてしまいます。統合失調症や障害児が、入院をして治るということはありません。問題行動が一時的に改善するぐらいです。

カンボジアのNGOで研修会をする筆者

日本の家族と地域の問題点

当たり前ですが、誰であったとしても、家族や地域社会から特別視され邪魔者扱いされながら、生き生きと生活していくことなどできません。カンボジアでは、家族や地域社会が、精神疾患や障害をもつ人を他の人と区別することなく受け入れています。それに対して、日本では家族や社会が、彼らを特別視して、区別（差別）してしまっています。このことが、精神疾患や障害自体よりも、彼らの心にダメージを与えているのです。

さらに、日本の社会と違うのは、カンボジア社会では、仏教が根付いており、地域の教育や福祉に寺院や僧侶、そして仏教を中心とした互助の思想が大きな役割を果たしている、ということです。この点については、機会があれば、またお話をしようと思います。

もちろん、彼らが適切な教育や医療を受けることが悪いというわけではありません。教育や医療を受ける機会は、カンボジアでも提供すべきです。しかし、カンボジアと比べた時、日本の家族や社会のあり方に、はるかに大きな問題を抱えているということです。

私自身は、途上国支援をおこなっていく中で、日本の家族や社会の問題点を違った視点から見ることができました。日本の教育方法や医療技術はとても進んでおり、世界最先端の国の一つです。しかし、社会的弱者を受け入れる家族や地域社会の力は、カンボジアよりずっと低いように感じます。私たちは、昔の日本にはあったであろう、そして経済発展とともに忘れてしまった、豊かな家族関係やお互いが助け合う地域社会を、もう一度作っていかなくてはなりません。これからの日本の発展には、家族と地域社会の立て直しこそが、もっとも求められていることだと感じています。E

情報ファイル

文科省「学校基本調査」
大卒者の16%が進路定まらず
社会の門狭く、フリーター化に拍車

文部科学省の学校基本調査（速報）によると、二〇一一年三月に大学を卒業した者のうち、進学も就職もせず、一時的な仕事にも就かず、進路が定まらない者が全体の一五・九%に当たる八万七千九百八十八人いることが分かった。大学の入り口は広くなったが、社会へ入る道は厳しさを増している。

今春大学を卒業した者は五十五万二千七百九十四人。卒業後の進路状況を見ると、全体の六一・六%が就職、一二・八%が大学院等への進学だ。進学者のなかには就職できず、やむなく大学院進学を選択した者もいる。またアルバイトなど一時的な仕事に就いた者は三・五%（一万九千百四十六人）。進路未定者と一時的な仕事に就いた者を合わせると、大卒者の二割弱、十万七千人に上る。

背景には、雇用の側と就職希望者とのミスマッチがある。就職しても三年以内に大卒者の四割が離職している状況だ。

来年度以降も就職率の低迷が続けば、若者のフリーター化や引きこもりにつながりかねない。すでに若年無業者は約六十万人を超すと言われている。若者が社会の一員として自立できるように、キャリア教育、職業教育の充実が急がれる。

一方、大学院では修士課程修了者七万四千六百七十五人のうち、一〇・八%が大学院博士課程等へ進学、七二・三%が就職している。進学も就職もしていない進路未定者は一二・一%。大学院博士課程修了者では実に一八・〇%に上る。最も厳しいのは、文系大学院修士修了者で、進路未定者は三割に達している。

高度な専門知識を修得した人材がその能力を生かせないとするなら、大きな社会・経済的損失だ。ただ日本では大学院教育が高度な人材育成機関として機能しているとは言えないとの指摘もある。大学院教育の質、量ともに充実が求められている。

大学（学部）卒業生の状況 各年3月卒業者

11年の（ ）は卒業者全体に占める割合

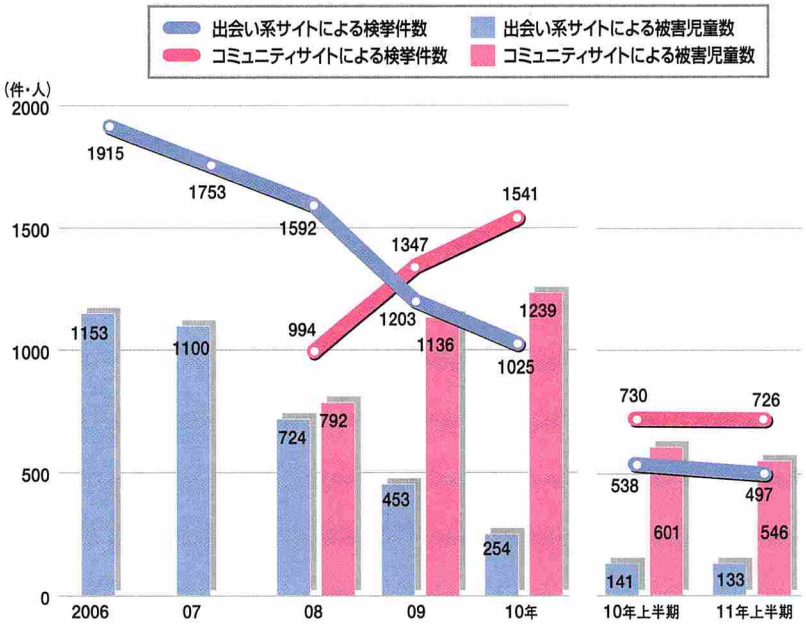
文部科学省「学校基本調査」

警察庁「出会い系サイト等の事件」

コミュニティサイトの被害、初の減少

被害児童の3人に1人は14歳以下

出会い系サイトとコミュニティサイトによる事件の検挙件数と被害児童数



警察庁「平成23年上半期の出会い系サイト等に起因する事犯の検挙状況について」

今年上半期（一～六月）に、SNS、プロフィールサイトなど「コミュニティサイト」を利用して児童（十八歳未満）が犯罪被害に遭った事件の検挙数は七百二十六件（前年同期比四件減）、被害児童数は五百四十六人（同五十五人減）と、統計を取り始めた二〇〇八年以降で初めて減少した。警察庁がまとめた。

出会い系サイトに関係した事件の検挙数は四百九十七件（同四十一件減）、被害児童数は百三十三人（同八人減）だった。

また、コミュニティサイトでは十四歳以下の被害児童が百八十一人（三三・二％）と、低年齢層の被害が目立つ。出会い系サイトでは二十五人（一八・八％）。

同庁は対策として、「ミニメール内容確認など自主的なサイト内監視体制の強化」「フィルタリングの普及」「悪意ある大人が児童に近づけさせないようにする『ゾーニング』」、さらに「モバイルコンテンツ審査・運用監視機構（EMA）への情報提供によるサイトの厳格な認定・監視」などをあげている。

今回の減少は、大手サイトが監視を強化するなど、対策の成果と見られている。

ただ、「健全」と認定されたサイトからでも、子供が有害サイトに行き着くケースもあり、サイトの認定や監視の一層の強化が求められるところだ。

また、東京都が行った調査では、携帯電話利用のルールについて、親が子供に注意する内容は「料金の高さ」や「利用時間」が多く、有害サイトやプロフィールサイトなど内容そのものについての注意が少ないという結果が出ている（東京都「平成二十二年度インターネット・携帯電話利用に関する実態調査報告書」）。子供の被害を防ぐためにも、家庭での見守り、親のさらなる意識向上が重要だ。

家庭の価値を守るために今何をすべきか

「文化共産主義」から家庭を守り、宗教、道徳教育や地域と文化を守る対策が必要だ。

核心にあるのは「家庭の弱体化」

近年、日本では伝統文化や社会基盤が弱くなっています。

その中で、一部の人々は伝統文化や社会基盤を弱体化し、家族や社会の枠組みを壊して社会を変革する必要があるという認識で運動している。そのような人々を「文化共産主義者」と名付けます。

これは、社民党や民主党の一部の人々も同じです。表向きは「民主主義」という形を取っています。それがイタリア共産党の指導者グラムシの流れから始まった文化共産主義の特徴です。

その核心になるのが、①家庭の弱体化です。例えば「子ども手当」ですが、「子供は社会が育てる」というのが理念です。子ども手当に所得制限を設けるかどうかが議論になりましたが、これは決して財政上の問題からではありません。子供は社会で育てるという理念による政策から来るものです。つまり子ども手当はあくまで子供に渡すものであって、親が受け取るのではない。子供には所得がありませんから、所得制限をつけるのはおかしい、彼らの政策理念と矛盾することになるというわけです。

自民党の児童手当は親に対する補助ですから、親の所得が高ければ出す必要はありません。民主党の子ども手当の理念でいえば、もし子ども手当を親が勝手に使ったら、子供が親を訴えて裁判を起こすこともできるそうです。

家庭の最も重要な機能を弱体化

家庭の最も基本的な要素の一つは、子供を生み育てる機能です。あるいは、その家庭のなかで文化を継承し、社会の価値観を引き継いでいく母体となっている場所です。子供は社会が育てるという子ども手当の理念は、結果として家庭の基本的な機能を弱体化し、分解しようとしています。かつて、こうした家庭破壊を急進的に行ったのはカンボジアのポル・ポト政権でした。もちろん民主党はそこまで目論んでいるわけではないでしょうが、緩やかな形で家庭の持つ一番重要な機能を弱体化させようとしているのは間違いありません。

あるいは、「選択的夫婦別姓」もそうです。もともと日本は明治期になるまで夫婦別姓でした。韓国や中国は父親の姓を引き継ぐ血縁主義です。その結果として夫婦別姓になります。日本は江戸時代も正式には夫婦別姓でしたが、日常的には夫の姓で呼ばれていたようです。明治になって夫の姓を名乗るようになったのは自然な流れで、

菅野英機
すがの・ひでき
日本民俗経済学会理事長
1942年生まれ。国学院大学大学院経済学研究科博士課程修了。天理大学、秋田経済法科大学、新潟産業大学を経て、上武大学教授を務める。専門は理論経済学。著書に『民俗経済学への招待』他。

違和感がありませんでした。

別姓を唱える人たちが「同姓では不都合だ」と主張する事柄は、通称使用、養子縁組などによって多くはクリアできることです。

選択的夫婦別姓というのは、自由に父方の姓と母方の姓を選択できるということですから、親子、兄弟でも姓が違ってくる。あえて選択的夫婦別姓を唱えるのは、古来の夫婦別姓に戻すというのではなく、家族として一体性のないシステムを目指すということです。

宗教、国旗国歌 過激な性教育

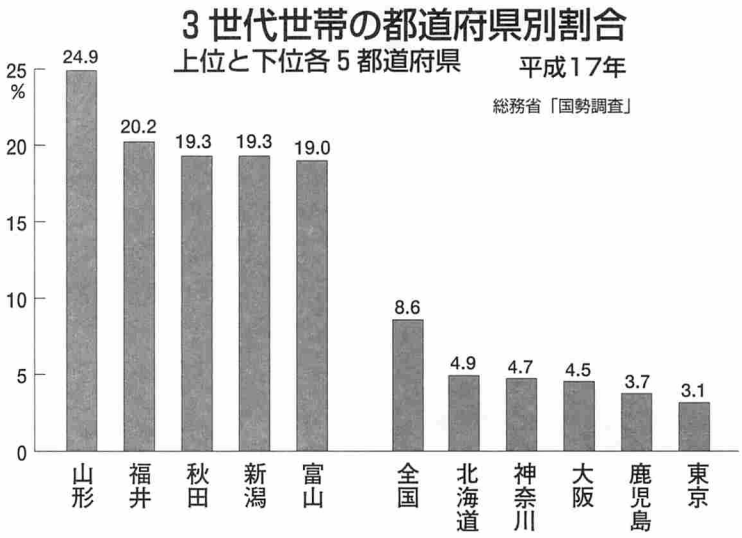
また、「文化共産主義」の問題として、②社会を支えている価値の弱体化があります。

「宗教への攻撃」もその一つです。例えば、政教分離と称して、地鎮祭は国の税金を宗教に使っているという、揚げ足とりの非難があります。これは社会基盤の土台にある宗教への攻撃だと思います。

「国旗国歌に対する非難」もそうです。国旗国歌は民族、国民がひとつになる意味で重要なファクターをもっている。どの国もいい意味でのナショナリズムは必要です。それを攻撃するのは社会の基盤、国民国家の基盤を揺るがそうという意図が見えます。

さらに、「過激な性教育」も大きな問題になりました。男女共同参画社会の実現が盛んに言われてきましたが、男女が真に共生し社会のなかで女性も一定の役割を担っていくという意味では、男女共同参画は必要なことです。しかし男性と女性の性差は、社会的につくられたもので生物学的医学的な性差はないという非科学的な理論を土台に、教育現場で過激な性教育を行う。あるいは男女混合名簿や小学校で更衣室を男女同室にするなどは、健全な社会を破壊しようとするものだと言わざるを得ない。社会が持っている男性・女性という健全な区分、歴史の中で培われてきた健全な文化を破壊しようとしていると見ることができます。

男女の本当の共生は今のような共同参画や過激な性教育によって実現するようなものではありません。本当の男女共生を育てあげる別の政策が必要です。



家族を単位とした税制を考える

次に、こうした問題に対する対策を提案します。

まず①家庭・家族の再構築が必要です。具体策の一つは、三世帯同居の推進です。三世代同居する地域は犯罪が少ない、離婚が少ない、出生率が高いといった傾向があります。また、福井県や秋田県など小中学生の学力と体力が高いという統計もあります。家族が三世代で暮らすことが健全な社会の礎石だということを表しています。

また、少子化対策に関しては、家族をばらばらに分けて、老人対策、子供対策を別々に打ち出すより、一つの家族を単位として考えていくべきだと考えます。その点で、スウェーデンを例にあげてみます。スウェーデンは「スウェーデンモデ

ル」と言われる個人中心の政策が進み、家族が崩れていきました。そうした意味では手本にはならないでしょう。しかし、ここに来て、「老人を家庭に帰す」という政策によって方向転換を図っているところもあります。

税制で見ると、離れて暮らしていても協力し会う老人世帯と子供世帯の所得を全て合わせて家族の数で割るのです。そして家族の一人当たり家計所得に所得税をかける。そうすると独身が最も税負担率が高くなり、扶養する老人、子供が多いほど所得税が減ります。老人世帯も子供も含めて協力しあう三世帯家族のほうが、所得税が少なくてすむわけです。こうした政策によって、出生率も急激に回復しています。

宗教的価値や道徳の教育を

さらに、②宗教に代表される伝統価値の涵養、③宗教的情緒を含む道徳教育が重要です。

社会基盤や家庭の弱体化に対して必要な対策

①家庭・家族の再構築
　a.三世代同居の推進、など
②宗教に代表される伝統価値の涵養
③宗教的情緒を含む道徳教育
④伝統文化の掘り起こしと強化
⑤社会の礎石となっている伝統的地域社会と文化の再構成

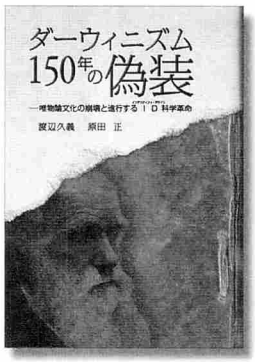
象徴的な言い方をすれば、二宮尊徳の銅像を壊した頃から、日本は様々な問題が表に出てきています。尊徳像は、「勤勉」「節約」「正直」「家族愛」「隣人愛」「郷土愛」等の徳目を象徴しており、倫理観が最も育つ時期の小学生が、毎日目にする処に建てられていることで、いつの間にかそれらの徳目が身に付く効果がありました。

これらの徳目は、神道、儒教、仏教、キリスト教に根底で重なり通ずる理念であり、尊徳像がプロテスタントの重要な書物から採用されたのも、偶然ではなく明治の賢人の深い知恵によります。

そして、④伝統文化の掘り起こしと強化、⑤社会の礎石となっている伝統的地域社会と文化の再構成の必要性を提言していくべきだと思います。

日本では古くから、「人の物は盗まない」「嘘はつかない」「約束は破らない」「困っている人を見て見ぬふりをしない」等の伝統文化があり、これらを破る事は人としての「恥」と教えられていました。誰も見ていなくても、神あるいは天がいつでも見ており、それらを守らなければ「罰」が当たると考えられていたのです。

尊徳像が消えた頃から、神が消え人が見ていなければ、何をしても良く、大都市では人が見ていても顔も名前も分からず、自分にとって利益になるかならないかだけを判断基準として功利的な行為に走る人が増えました。もう一度「恥」の文化を取り戻しましょう。E



本書は、多くの人々の目を覚まさせるに違いない！
しかし本書は、ある種の人々を間違いなく不快にさせるだろう…

ダーウィニズム150年の偽装
——唯物論文化の崩壊と進行するID科学革命（インテリジェント・デザイン）

なぜ唯物論という「いびつな哲学」が社会を支配してきたのか。ここに、鮮やかな謎解きの旅が始まる。

渡辺久義／原田 正 著
A5版／324ページ／ハードカバー上製本／2500円+税

ご注文は書店へ　お急ぎの方は下記までご連絡ください
アートヴィレッジ　http://art-v.jp
受注センター：〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町3-3-18
TEL.078-882-9305 FAX.078-801-0006

子育ては＊絵本で＊大丈夫（だいじょうぶ）

＊14

浜島代志子
劇団天童／
天童芸術学校代表

ほんとうの幸せはどこにあるの？

「まちのねずみといなかのねずみ」

「まちのねずみといなかのねずみ」
ポール・ガルドン／童話館出版

この物語はイソップ寓話ですが、なんとまあ、真実を良く言い当てていることでしょう。紀元前のイソップのことについては良くわかっていませんが、人生への洞察力は、素晴らしいです。聖書の中にも、あれ？これはイソップにもあるな、と思わせる物語がたくさんあります。後世のグリムにもおおいに影響を与えたと思われます。

◇　◇　◇

本題に入りましょう。この絵本を描いた作家は、ポール・ガルドン、絵も文も描く方です。イソップ、昔話の筋は単純明快ですからこども向けと思われていますが、とんでもない、深い人生の道しるべ、真理が潜んでいるのです。ガルドンは、昔話の隠れ真実を絵と文で表しています。まちのねずみの衣裳をご覧ください。まるで、ど派手な帽子の羽根飾り、翻るマント、上から下までぎんぎらぎん、ダルタニアンをキザにしたみたい。それにくらべていなかのねずみは肱につぎのあたった茶色いずんどうの服、飾りなんてどこにもない。こんな二人が仲良しというのもおもしろいですね。

宮殿に住むまちのねずみが、さかんに誘います。「宮殿の華やかさ、上品さ、ごちそう、見逃すもんじゃないよ」。宮殿は華やかでごちそうがありましたが、犬やねこにびくびくして逃げ回る暮らしでした。

いなかのねずみが、いなかに駆け戻ったのは言うまでもありません。木のベッドですやすや眠るいなかのねずみの幸せそうなこと！マサチューセッツにあるガルドンの家はこんなふうでした。ガルドンは、絵本を通してほんとうの幸せは何かということを子ども達に伝えてくれました。

◇　◇　◇

天童芸術学校ミュージカルレッスンの終わりにこの絵本を読み語りしました。読み終わってから「みんなは、どっちのねずみがいいかな」と、語りかけますと、「いなかのねずみ！」「どうしていなかのねずみがいいの？　宮殿にはおいしいごちそうがあるし、見て、きれいな服を着ているじゃない」「だってさ、いつもびくびくしてるのいやだよ」「自然もないしさ」「そうだよ」「先生はどっちが好き？」「やはり、いなかのねずみよ。こんな暮らしがしたいな」「ねえー！」、皆で顔を見合わせました。

何が大切なのか、ほんとうの幸せって何かということを心にしっかり植え付けてくれる絵本です。E

ワールド・アフェアーズ

米国で広がる「結婚教育」運動と「人格教育」

米国では年々、婚姻率が低下し、同棲するカップルが少なくない。しかし、同棲世帯の子供に深刻な情緒障害が多くみられることから、警鐘を鳴らす研究者も出ている。こうした中、改めて「結婚教育」「人格教育」の必要性が叫ばれている。

ジャーナリスト・内田宏

婚姻制度の衰退

米国政府はこの八月、米国民の婚姻状況に関する統計を発表した。この統計は正式なものとしては約二十年ぶりに出されたものだが、これまで取りざたされていた婚姻率の低下や、同棲世帯の増加など、同国が抱える「家庭の問題」を裏付けるものとなった。

このうち、意外だったのが、結婚に関してリベラルな考え方が強い西海岸と東海岸よりも、保守的な南部のほうが離婚率が高かったことだ。研究者の見解では、両岸地域よりも南部のほうが結婚数が多いため、離婚も増えているとのことだが、一部の識者からは「夫の権限が強いため、日常生活の中で妻の不満が溜まってしまうのではないか」との意見も出ている。

いずれにしても、南部での離婚率の増加は、米国の婚姻制度の衰退を象徴しているものでもあり、見過ごすことはできない。これらの地域は、いわゆるバイブルベルトにあたり、キリスト教保守派による「結婚保護運動」が盛んなところでもあり、米国全体でますます、伝統的な価値観が揺らいできていることが見て取れる。

今回の統計によると、男性千人につき、約十九人が婚姻状態にあり、約九人が離婚している。また、女性の場合は約十八人が婚姻状態にあり、約十人が離婚を経験している。また、離婚した場合、父親と共に暮らす割合は一八%、母親と暮らすのは四四%と、子供は母親に引き取られるケースが多い。

同棲世帯では子供が精神的不安定に

また、女性の場合、離婚後に公的援助を受けるのは二三%。貧困状態に陥る女性は二二%と、生活に窮するようになってしまう。こうなると、やむなく同棲するパートナーを探さざるを得ないという人も出てくる。政府の統計でも離婚後、男女を問わず、結婚せずに同棲を始めるケースが少なくないことが明らかになっている。

しかし、親の同棲で精神的に不安定な立場に立たされるのが連れ子となる子供だ。米国では、約七千五百万人の未成年者がいるが、そのうち二七%がひとり親家庭で育つ。さらに約二三%の子供が母親とその交際相手と同居。また、統計では四%の子供が同棲世帯で生まれている。

今年七月、バージニア大学の家庭生活・結婚研究所は、同棲世帯

で育った子供が、「家庭生活の質や安定に重大な問題が生じる」可能性があると指摘。六歳から十一歳までの子供のうち、深刻な情緒障害にある子供は、両親が法的な婚姻状態にある嫡出子の場合、わずか四%に過ぎないが、同棲世帯に属する子供では一六%に上ることを明らかにしている。

同研究所は、この原因として、同棲カップルと子供の関係が希薄なことに起因すると説明。カップルが親として、夫婦としての自覚を持ち、より深い心情的かかわりを子供と持つことで、事態は改善するはずとの見解を示している。

改めて見直される結婚教育

バージニア大学の研究を主導したブレッドフォード・ウィルコックス教授は、若者が結婚をしないまま同棲を始める前に、高校を卒業し職についてから結婚することの大切さを教えるべきと強調。さらに、結婚や家庭生活を成功に導く人格教育の必要性を説いている。

男性の家庭参加、また結婚前の心身共の準備、そして結婚後にいかに家庭を守っていくかを学ぶのが「結婚教育」の主眼になる。そして、米国ではこの動きが社会運動までつながっている。

特に、実践的な視点で、結婚問題を解決しようとする動きが盛んになっている。これは一九八〇年代以降、注目され始めた「人間関係教育」(リレーションシップ・エデュケーション)とも関わっているが、夫婦関係の問題を解決する「技術」をワークショップなどで教えるものだ。

結婚教育では、「夫は~でなければならない」「妻は~でなければならない」と説くのではなく、結婚生活を「共同作業の場」として捉え、お互いを理解し、お互いが問題点を共に解決していく方法を教えている。

結婚教育運動のうち、全米規模で活動している団体「スマート・マレッジ」の教育ワークショップが最もよく知られている。

結婚教育の場合、いかに配偶者と円滑な関係を築くかという技術・知識習得に重点が置かれている。夫婦間のコミュニケーション方法、すなわち、お互いの主張・考え方に耳を傾け、日々起こってくる食い違いをいかに克服するかを学び、夫婦が共に努力し、より協調できる関係を作るための技術を教えている。

こうした「結婚教育運動」の大切さがどこまで同棲カップルやひとり親家庭に広がるか。評価機関が行った調査によると、婚姻カップルに対する結婚教育に比べて、同棲カップルに行われた教育の効果があまり出ていない。その原因は不明だが、法的婚姻がもたらす配偶者へのコミットメントの深さと恣意的な同棲のそれとの違いではないかとの見方も出ている。

責任ある結婚観・家庭観を確立していくことは急務だ。次の時代を背負う若者を育てるためにも、結婚や家庭生活を成功に導く人格教育、結婚教育が最も重要なテーマの一つだ。E

全米で結婚教育を推進する「スマート・マレッジ」のウェブ・サイト　URL=http://www.smartmarriages.com/index.html

発言

『二十五時』の意味するもの
――東洋精神への待望

技術万能社会は、人間を機械の部品のように貶めた。その社会が崩壊すれば、必ず精神的復興が行われる。そしてその光は東アジアからあらわれるだろう。

技術万能主義の西欧文明社会

時の流れは矢のごとく疾い。あれから六十有余年の時が流れたが、私は学徒出陣で戦争に参加している。軍隊という、いわば強制収容所で、人間の不条理をいやというほど見せつけられた。「人間は万能ではない」と、まだ二十歳そこそこに、すでに体験的にかいま見てしまったのだ。

そして敗戦、復員して物理的にも精神的にも崩壊した戦後日本の流離顛沛の中で、なお明日を生き続けねばならぬとしたら、いったい何を心の拠りどころとし、原動力としたらよいのか。日々、深刻に悩み続けた。

たまたま、ルーマニアの現代作家ゲオルギウの『二十五時』(河盛好蔵訳)を手にする機会があった。以後、この小説は私の枕頭の書の一冊になっている。この小説は『十字砲火』叢書としてフランス語で出版された。

では、『二十五時』とは、どんな意味なのか。それは最後の時間の後に来る時間ということで、メシア(救世主)の降臨を以てしても何一つ解決されない絶望の時間という意味だ。というのは、「技術万能主義化された西欧文明社会は精神を創造することができず、従って人間にあらざる怪物に身を引渡したからだ」。

そこには、十八世紀以来、「進歩」の観念によって進んできた人間のあり方に対する絶望的な抗議が含まれている。――「進歩の最後の段階にある西欧文明は、もはや個人のことなど意識においていない。独自の、かけがえのない価値をもった生ける人間、すなわち『個人』はもはや存在を許されない。社会は技術を力にした巨大な機械になり、人間は技術の眼で見られ、社会的次元でのみとらえられ、人間関係は機械の部品の相互関係に変じたのだ」と。

生ける人間は、もはや存在しない。「われわれは存在していないのだ」と『二十五時』の主人公はいう。人間に代わる新しい種属は、「技術奴隷」である市民にほかならない。

「偉大な光は東アジアから」

「しばらく前から、地球上に動物の新種が現れた。この新種を市民という。彼らは森の中にもジャングルの中にも住まわずに、事務所

河端春雄

かわばた・はるお

哲学者、文学博士

1926年北海道生まれ。哲学専攻。『実存哲学』『ニーチェの光と影』『技術の思想』『大学の使命』など著訳書、論文多数。他に看護教育について『看護教育方法学』などがある。

の中に住んでいる。しかも、彼らはジャングルの野獣よりもずっと残酷なのだ。彼らは、人間と機械との雑種として生まれた退化種族なのだ」。

すなわち、西欧文化の伝統の最も貴重な部分、「人間に対する愛と尊敬」とが失われ、死物と化した。技術万能社会の出現は、人間蔑視の観念と人間は単なる社会的次元にまで下落させられてしまった。

だが、「やがて全地球上を征服する技術万能社会も、いずれはそれ自身滅亡するだろう」「技術万能社会の崩壊に続いて人間的価値、精神的価値のルネサンスが行われるだろう。この偉大な光は必ず東アジアからあらわれるだろう。東洋の人間は『精神』によって、技術万能社会の機械の主人公になるだろう」。

東アジアに対する黙示録的な待望が、『二十五時』にはあらわれている。ちなみに、私がはじめて訪韓したのは一九七五年だったが、ある国会議員に招待されてご自宅を訪問したことがある。その応接間にゲオルギウがしばしば訪れたと聞かされ、一時期を韓国に亡命生活を送っていたことを知った。

ゲオルギウの小説「25時」（筑摩書房刊）

中国を旅行すると、よく晴れた日には、クーリー（苦力）と呼ばれる下層労働者とか貧しい農民などが、木立に鳥籠を掛けて、その鳴き声に日がな一日、飽きずに聞き入っている姿を見かける。こうした東洋の原始的存在者の姿は、西洋人が「東洋的怠惰」（oriental idleness）と呼ぶものだ。すでに「進歩」の方向にある西欧的人間の眼からは、全く異なった生活理想を尺度にしているからにほかならない。だが、例えば機械に負けない能率をあげて活動しているビジネスマンと、かの原始的存在者とでは、どちらが真に人生を生き、人生を味わっているといえるだろうか。

東洋の遺産を深く省みよ

いうまでもなく、彼らにとっては詩や哲学は無縁だろう。が、そこから詩や哲学が生まれる「生」の感情や瞑想を、彼はもつに至るだろう。確かに、それは「植物的」かもしれない。だが、「人間」にとって植物的であることは、必ずしも動物的より低次元にあるとはいえない。十八世紀以来、人間が「進歩」の方向をとった時点から、その動物性を植物性から切り離してきたのだ。その結果、自然なる人生から離れて、ついには自分自身を機械に、人工物に化しつつあるのだ。

仏教徒われらしらずに声あげんブッダの言葉「兵矛無用（ひょうがむよう）」と。

ある新聞に載った一首だが（「朝日歌壇」）、老子や仏教以上に深く「和」の精神を徹底させた哲学は、世界のどこにもない。われわれ東洋の人間は精神的・宗教的な意味で、われわれ自身が、そしてわれわれ自身のみが継承している遺産を深く省みる必要があるのではないか。それは世界に対するわれわれ東洋人の責務であろう。E

逆境を越えてゆく者へ

新渡戸稲造著／実業之日本社／一五七五円（税込）

名著『修養』と『自警』の二つから「苦難の時代をいかに生きるか」というテーマで精選、百年ぶりに復刻された。

「全力で努力する者は、遅かれ早かれ逆境から浮かびあがる」。心に残る名言のひとつだ。新渡戸はさらにこう述べている。逆境には天がもたらすものと自ら作り出すもの、二つある。病的に見れば羨みとなり、健全に見れば励みとなる。天を怨み、人を憎むのが人の常だが、他者のせいにせず、逆境を善用すれば修養の糧となる。

百年前、青少年の精神修養と人格鍛錬への力添えとして語ったものだが、震災という艱難を生きる時代に、強いメッセージ性を放っている。例えば「少し爪先立ちをして前を見よ」という一節。諦めかけた人生を前に踏み出させる、言葉の力がある。それは自身が越えてきた路程だからだろう。若き日の苦悩が偲ばれ、共感を呼ぶ。

また日本と世界の架け橋として世界平和を何よりも願っていた。「一人の苦しみは万人の苦しみ、一人の喜びは万人の喜びと考えれば、世界は美しい調和に達する」という平和メッセージは、復興を願う日本人の心に響く。時を得た復刻本だ。

◇

米国製エリートは本当にすごいのか？

佐々木紀彦著／東洋経済新報社／一五七五円（税込）

東日本大震災を通して、日本のリーダーの指導力の欠如が批判を浴びた。米スタンフォード大学に留学した著者は、米国の大学の姿からエリート育成システムを探り、エリート教育の重要性を説く。

著者によると、米国の大学にも「すごいところ」と「見かけ倒し」の部分があるが、「日本が学ぶべきところは数多い」と言う。

例えば、米国の学生は数学力はそれほど高くなく、授業の質も日本人が考えるほど高くない。

一方で、最低でも四年間に四百八十冊の本を読まされる知識のインプット、多くの知識や経験を整理してつなげる能力（膨大なレポート）、アウトプット（討論やプレゼン）、歴史の重視など、知力の源泉を徹底して身に付けているという。

そして著者は、現場にも戦略にも強く、バランスの良い愛国心を持った日本オリジナルのエリートを育てる条件を提案する。

「魂の教育」とは何か

人格教育では、子供たちが教師や父母など模範となる人の人格に触れて良い影響を受けることが大切です。また、「人格」の語源には「魂に刻まれたもの」という意味があります。「魂の教育」は人格の核心とも言える魂の無限の可能性に気づき、その魂を強めていくこと、あるいは子供たちが自己の内面の価値に目覚めて人格の形成をなすことだと考えます。例えば、「大自然に大いなるものの存在を感じる」と言いますが、そうした無限の価値、意識のようなものを自分自身の中に見出すことだと言うこともできるでしょう。

■表紙写真　金沢・初秋の兼六園　撮影・大塚克己

「ノーTVデー」で豊かな時間を

七月二十四日にテレビ放送がアナログから地上デジタルに完全移行した際、未対応のために番組視聴ができなくなる「地デジ難民」が何万世帯でるか、と関心を集めましたが、地デジ移行に関係なく、日本ではいま、テレビ離れが進んでいます。インターネットの普及など、メディアの多様化が原因として指摘されています。しかし、より根本的な問題は質の良い番組が減ったからです。下品なバラエティばかりが目立ち、かつてのような家族みんなで楽しめる番組は本当に少なくなりました。

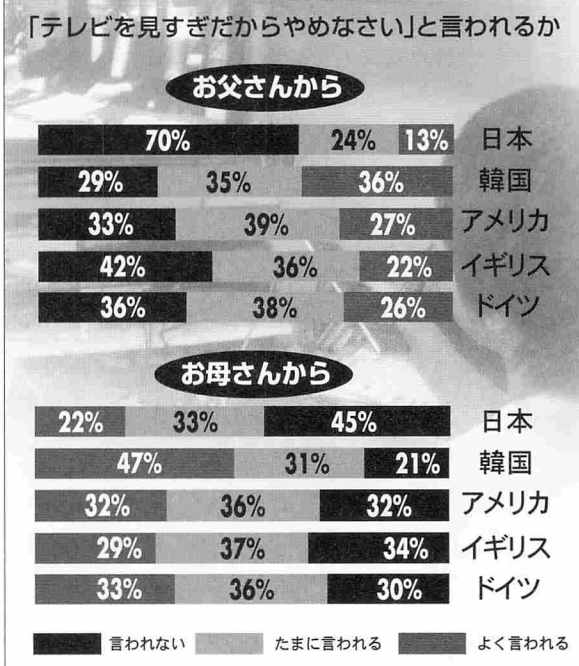
とは言っても、子供たちはまだまだテレビにかじりついている時間が長く、お笑い芸人たちの乱暴な言葉遣いを真似るなど、テレビの悪影響を受けています。特に、夏休み中は、テレビを見る時間は普段よりも長くなる傾向があり、頭を悩ませる保護者が多かったのではないでしょうか。

特に、小さな子供の場合、テレビの見過ぎは心身の発達に悪影響を及ぼします。たとえば、言葉の発達の妨げになることから、二歳以下の子供にはあまりテレビを見せないほうがいい、と日本小児科医会は提言しています。言葉の発達には、家族との会話がもっとも大切ですが、テレビはその時間を奪ってしまうというのです。

そこで、週に最低一日、家庭でテレビのスイッチを入れない「ノーテレビデー」を設けてはどうでしょうか。一家団欒の時間が増えるだけでなく、節電にもなりますので、一挙両得です。ノーテレビデー運動は米国で盛んですが、日本でも地域ぐるみで週一回、テレビを見ないだけでなく、ゲームもしない日に指定しているところもあります。

政府は十年前「子供の体験活動等に関する国際比較調査」を行い、その中で「テレビの見過ぎを注意しない親の割合」は日本が一番多いという結果が出ました。日本人は、メディアに対して無防備な国民と言えるのです。

テレビを消すとその分、スポーツ、読書などで豊かな時間を過ごすことができます。そして、私たちはテレビによって貴重な時間を奪われていることに気づくことでしょう。



子供の体験活動等に関する国際比較報告書（文部科学省）

毎月第3日曜日は「家庭の日」
11月第3日曜日は「家族の日」

「家庭の日」は、社団法人「青少年育成国民会議」が進めてきた「家庭の日」運動に端を発し、今ではほとんどの自治体が、第三日曜日を「家庭の日」に定めています。さらに政府は十一月の第三日曜日を「家族の日」、その前後一週間は「家庭の週間」として定めました。この日を機会に、家族の強い絆を確認できれば、それは家族みんなへの素敵なプレゼントになるでしょう。

家庭は愛の学校

真の家庭運動推進協議会

The Association for the Promotion of True Families

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-13-2 成約ビル4F
電話03(6457)7760 FAX03(6457)7761 http://www.aptf.gr.jp

●皆様の御意見や気づいたことをお寄せ下さい。 教育問題に関して、皆様の身の回りでの様々な出来事や御意見などを真の家庭運動推進協議会本部までお寄せ下さい。お寄せいただいたものを参考にしながら、皆様と共によりよい教育環境や家庭づくりに取り組んでいきたいと考えています。

圓一
第3種郵便物認可
2011年10月10日発行
毎月10日発行・通巻257号

歴史と伝統の探訪

平泉、「浄土」を表す世界遺産／岩手

（左上より時計回りに）「平泉文化遺産」（平泉町世界遺産推進室）のホームページ＝http://www.town.hiraizumi.iwate.jp/hiraizumi/top.html、中尊寺金色堂（覆堂、PIXTA）、毛越寺庭園（PIXTA）

今年六月、世界文化遺産に登録された岩手・平泉の文化遺産。東日本大震災からの復興の象徴に、と期待されている。

平泉は十一～十二世紀にかけて奥州藤原氏が治めた地である。前九年の役（一〇五一～六二年）、後三年の役（一〇八三～八六年）の戦乱の後、藤原清衡は本拠地を江刺郡豊田館（現在の奥州市）から磐井郡平泉に移し、四代にわたる奥州藤原氏が始まる。

清衡は幼少の頃から、親族同士の争いに巻き込まれ、多くの近親者の死を体験。そうしたことから、奥州全体を仏教により治めようとしたという。中尊寺建立の際、戦乱で亡くなった多くの人々の霊を弔い、敵味方の区別なく、中尊寺の鐘を打ち鳴らすたびに御霊を慰め、極楽浄土に導きたいと書き残している（「中尊寺建立供養願文」）。

このように平泉は、浄土思想に基づき現世の仏国土（浄土）の実現を目指した。

また、三代の秀衡は平家により鎮守府将軍、陸奥守に任官され、絶大な権力を手にしたが、戦に荷担せず、政治的にも経済的にも独立した立場を守った。

平泉と周辺には、国宝の中尊寺金色堂など、奥州藤原氏が築いた仏教寺院、庭園をはじめ多くの遺跡がある。今回、中尊寺、毛越寺、金鶏山（藤原秀衡が平泉鎮護のために造ったと言われる山）、無量光院跡、観自在王院跡の五カ所が、仏国を表現する遺産と評価された。

中尊寺には、比叡山延暦寺で開山以来千二百年以上ともされてきた「不滅の法灯」が分灯され、ともされている。Ⓔ

2011
10
no.257
En-ichi
●発行所
NCU-NEWS
（東西南北統一運動国民連合）
〒160-0022
東京都新宿区新宿5-13-2
成約ビル２Ｆ
TEL.03(5362)0631
FAX.03(3354)5017
E-mail news@en-ichi.org
URL http://www.en-ichi.org
●発行人　渡辺久義
京都大学名誉教授
定価 400円
[1年間5000円(送料込み)]
郵便振替番号
00160-3-667291
●本誌に対するご意見、ご感想をお寄せください。
●定期購読のお申し込みは、電話またはEメールでどうぞ。